

売れば、地域の農家も気力わく

金色に輝き出したコシヒカリの棚田を見回っていた時だった。下呂市萩原町宮田。今井隆さん(50)は、自分の田で、周りの稲より背が高く、もみも大きい2株を見つけた。

00年、収穫を間近に控えた9月だった。

「突然変異の米かな」

今井さんは翌年、その2株からとった種もみの苗を、コシヒカリとは別に植えた。秋、収穫した米を炊いて食べて驚いた。コシヒカリなどより粘りが強く、甘い。

今井さんは、新しい品種だと確信。米作りと表裏一体の関係にある水の神「龍」と、「新しい米として大きく輝いてほしい」との願いを込め、「龍の瞳」と名付けた。



公務員として県内を転勤して歩く今井さんは、9年前に居る故郷の旧萩原町に移した。現在は美濃加茂市に単身赴任中。農

②突然変異の米

繁期には、週末の時間の半分以上を田畑で過ごす生活が続いている。

02年には、龍の瞳の作付面積を一気に2ヶ年増やした。03年4月には農林水産省に新品種として登録を出願。04年からは栽培を龍の瞳だけに絞る、作付面積も一気に24割に。

「品種登録されれば栽培や販売で行政の協力も得やすくなり、多くの人にPRできる」と今井さんは意気込む。

基本的に1kg900円。通信販売をしているほか、市内の数軒の小売店にも卸し、市販している。

一般的に、稲は背が高いと風で倒れやすくなり、台風などに弱いとされる。だが、今井さんによると、龍の瞳は茎が太くて固いため、風に強く、育てやすい。いもち病にかかりやすい「体質」の克服が課題だという。



県によると、龍の瞳のような、一定の地域での独自の栽培

「龍の瞳」から広がる夢



02年に収穫された「龍の瞳」の種もみ。今井さんの夢がぎゅっと詰まっている。下呂市萩原町宮田の今井さん宅で

方法による米作りが県内で増えている。

品種はコシヒカリやハツシモだが、アイガモに除草をさせる「あいがも米」、米の甘みを増すために甘味料の元となるステビアのエキスを散布して育てる「夢風船」など、様々な方法で消費者に安心や安全性をアピールし、ほかの地域の米との差別化を図る。

県や全農県本部も、従来の米に加え、こうした方法で栽培された米についても、物産展で紹介するなどして売り込みに力を入れている。

県農産園芸課の雨宮功治技術課長補佐は「独自の農法で栽培し、販路が広がっている米に対しては、できるだけ協力していきたい。龍の瞳もこれから生産が広がる可能性がある」と話す。

近年、米価は全国的に長期低迷傾向にあり、中山間地域を中心に農家が耕作を放棄してしまつた田が増えている。今井さんは、そうした問題を解消する起爆剤として、龍の瞳を生かさないかと考えている。

「米が売れば、地域の農家も米作りをする気力がわいてくる。より多くの人が龍の瞳を作ること、農村が元の活気ある姿を取り戻せるようにしたい」と今井さんの夢は広がる。

岐阜 農業最前線